

「地域の経済分析」

井原健雄 著

中央経済社、3300 円

地域間の経済的諸活動の連関関係、すなわち空間的相互作用の解明は、地域科学の主要な研究課題であり、そこにおいて投入産出分析の地域への適用は、極めて有効な分析手段の一つに位置付けることができる。本書は、地域科学の生みの親 Walter Isard に学び、わが国を代表する地域科学者である著者が、長年にわたって取り組んできた投入産出分析の地域適用に基づく空間的相互作用の理論的、実証的研究に関する成果をとりまとめたものであり、現段階での著者の研究の集大成とも言える書物である。

本書の全体を通じた特色は、地域科学という研究のスタイルを強く意識した構成が取られていることである。W.Isard は、地域科学とは、「地域または空間の次元をもった社会問題について、分析的でしかも実証的な研究についての多様な結合を試みることによって、注意深くしかも忍耐強く調査研究するものである」と定義しているが、本書においては、地域間の経済的相互依存関係の解明という一貫したテーマに対して、「第II部 分析方法」では、逆行列の分解分析モデルを中心とした理論的な分析方法の提示が行われ、続く「第III部実証分析」ではその理論構成に立脚した実証分析に加えて、OD表に基づく輸送量分布係数モデルおよび因子分析モデルによる地域間交易量の計量分析、グラビティモデルを用いた地域間の財貨フロー分析など、多様な分析手法の導入が図られており、まさに「多様な結合」によって地域間の経済的相互依存関係の解明が試みられている。また、「第I部 地域概念」においては、地域科学の分析対象である「地域」の概念が検討され、地域科学として地域を如何に扱うべきかが示されている。ここでは単に地域概念を整理するのみでなく、地域科学はあくまでも地域を研究目的の手段(ないし、その方法)と考える「地域便宜説」の立場をとり、地域を研究の究極目標とする「地域个体説」との訣別を明確に宣言している。

本書で提示されている空間的相互作用の分析的理論フレームの中心を成す、第II部分析方法を詳細に見てみよう。ここではまず、基礎となる投入産出分析の概要が要領よく解説されると共に、基本的仮定の経済学的意味づけとそれを導入することの投入産出分析の操作上の利点が示され、これに続いて、地域間相互依存関係の分析方式の根幹を成す逆行列係数の分解分析の理論展開が行われている。この展開は Isard 型地域間投入産出分析に準拠した理論拡充であると同時に、宮沢の2部門分割モデル(産業グループを2部門分割し、その相互誘発関係を外部乗数・内部乗数に分解するモデル)の拡張と位置付けられるが、逐次的な地域分割を示した宮沢の展開に対し、著者等の展開は地域を同等に複数分割する方法を示しており、より一般的で同時に多くの地域を考慮できるモデルが構成されている。この展開において特に注目すべきことは、「複投入係数」という新しい概念が提示され、

複雑な多地域間の相互依存関係が簡潔に表現できるようにされたことであろう。とりわけ多地域間の複雑な連関構造に基づく外部乗数の表現においては、逐次構造で表現された複投入係数の一般式を用いることにより、著者が「総外部乗数」と呼ぶ簡潔な表現が可能となっている。

本書では、地域科学の主要な興味であって、もとより多様で複雑な側面を持つ空間的相互作用が、一貫して投入産出分析の体系の中で検討されることによって、論理的にしかも簡潔に解き明かされており、多くの研究者にとって興味深い内容となっている。また、本書で論じられる内容の性格上、初学者を対象としたものとは言えないが、初学者であっても理解しやすいよう基本的な事項や関連する知識も要領よく随所に書き込まれるなど、幅広い読者への配慮も成されている。本書に触発されて、地域間投入産出分析とそれによる空間的相互作用の研究がより多くの人によって行われることを期待したい。

書評者： 片田敏孝、群馬大学工学部建設工学科
(〒376 桐生市天神町 1-5-1)